
シュガーレス・スウィート・レイン

ムニプニ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シュガーレス・スウィート・レイン

【Nコード】

N5279S

【作者名】

ムニプニ

【あらすじ】

灰色の街で少年は、少女と出会う。止まった歯車が動きだす……。

（前書き）

徹夜で仕上げて、地元のコンクールにだして、当然のごとく落ちたもの。辛口批評まっけてます！！

あと、あらずじって難しい！！ タイトル決めるのと同じくらい難しいです！！

この街に雨が降る。
絶え間なく振り続ける雨。鬱々とした曇天の空。寒々とした空気。
季節なんて巡らない。取り残された街。
色彩なんて忘れてしまった。灰色の街。
暗い暗い、この街で、僕は生きている。

窓の外を見れば、雨が降っていた。
やまない雨。

—— どうせなら、土砂降りになればいいのに。
僕はメガネをかけて、ベッドから降りた。
息が白い。

ベッドに逆戻りしそうになるのを堪えた。この調子では服を着替えるのはきつと地獄だろう。……いつもの事ではあるのだが。
手早く着替えを済ませ、外を見る。
出かけよう。どうせすることもないんだから。

雨は静かに僕を濡らした。

小雨でも土砂降りでもない、中途半端な雨。傘をささずに歩くと
徐々に服が重くなる。同時に寒くなるが、これくらいで丁度いい。
行くあてもなく、街を徘徊する。

何も変わらない街並み。まるで時間が停まってしまった様な街。
凍った景色と無音の空気。

いつも通り、というのは少し違うか。停まっているのだから変わるはずもない。

酷く虚しい世界だ。

虚しいと思う心すら停まっている。この鼓動が加速することはないのだろうか。

諦念を払いのけるように、僕は頭を振った。

「え？」

視界の端で何かが揺れた。

馬鹿らしいと思う。ほとんど無意識に捻転した。骨が軋んだ気がするが、すぐに意識から押し出される。

視線の先には真白な少女がいた。僕以外の誰かが外に出歩くことも滅多にない。だから、この少女が誰なのかという疑問も浮かぶが、それも衝撃に掻き消された。

僕はその少女から目が離せなくなる。

——色があった。

初雪のようにまつさらなワンピース。澄み渡った青空の傘。

——音があった。

ちゃぷちゃぷとステップ。パラパラと雨粒の打楽器。

その空間だけ浮いていた。

灰色の雨すら澄んだ明るさを帯びている。いや、それだけではない。世界そのものが静かに息を吹き返していた。——停まっているはずのこの世界が。

純白の少女を中心に、全てが本来の意味を思い出していた。

ああ、なんて滑稽なんだろうか。遂に見つけたのに。遂に遂に、手に入れたのに。

こんなシナリオ、悪趣味な悲喜劇じゃないか。

か細い希望を見つめるよりも、絶望に縋ったほうが余程生産的じゃないか。

ああ、信じたことないけど神様

最悪な救いをありがとう！

打ち付ける様な拍動が聞こえてくる。全身の血管が膨張し、弾け飛びそうだ。感情とも感傷ともつかない、淡い重圧が体に沁みわたる。

ありていに言ってしまうば、少女は美しかった。容姿がではなく存在がだ。いや、彼女の名誉の為に誓っているが、容姿も美しい。というよりは可愛らしいと言うべきだろう。趣味嗜好を差し引いたとしても、十分に好感が持てる容姿だ。だが、それ以上に彼女の存在——纏っている雰囲気は虚ろな僕を染め上げる。

ある種、現実から乖離した幻想的な白さ。彼女の体は異様に白くこの灰色の世界に色を産む。そして、呼応するかのように周囲の空気も生き生きと輝いていた。

いったいどれほどの間僕は彼女に見蕩れていたのだろうか。気がつけば、澄んだ瞳が僕を見つめていた。

「あ……」

言葉を紡ぐとしても、虚しく息だけがこぼれる。何をしているんだ声帯、頼むから仕事をしてくれ。役立たずな声帯の代わりに心臓が無駄に働き、嫌な汗が噴き出した。僕はどうしてもしまったと言うのだろうか？

少女は僕の事を不思議そうに眺めて、ゆっくりと僕に近づき——頬を引っ張った。容赦なく、全力で。当然のことながら、僕の頬はゴムではない。伸びるわけがない。

「ぬ、ぬにふるんふだ!？」

ようやく出た声は滑舌が悪かった。不本意だ。

「ねえ、貴方人間だよね!？　ね!？」

「え……　ああ、うん」

人間じゃなかったらなんだと言うのだろうか？

「よかったあ……　ようやく人に会えた」

——　ああ、そういうことか。

この街の人間が外に出るなんてことはほとんどない。だから、この街で人に巡り合うのは奇蹟に等しいだろう。

しかし、そんなことよりもだ。

この少女は一体何者なのだろう？

それだけじゃない。なぜ、どこから、いつ、どのように。疑問が渦巻き過ぎて纏まらない。

「ねえ、」

少女は上目遣いで僕を見つめ、

「雲の上に行ってみたくない？」

この灰色の街で一際目を引くのは塔だ。塔と言ってもほとんど棒の様な見た目だ。あるいは、空へと伸びる柱と言ったところか。塔は雲までのび、恐らくその先の空まで到達している。街の中心にそんなものがあるのは異様かもしれないが、この街の人間にそんなことを気にする人間はいない。ただ生きているだけの存在なのだから塔に入口があるのは前から知っていたのだが――

「ここから入るのか？」

「うん。その筈なんだけど……」

扉には特に鍵がかかっていなかったが、小さい。人一人分が通れるくらいの大きさだ。この塔のサイズと反比例しているんじゃないだろうか。何より、真暗なのだ。

「わ、私、懐中電灯もってきたよ！」

彼女はポケットから懐中電灯を二つ取り出した。

「用意が良いんだな」

「うん、一人じゃ恐いから……」

懐中電灯を受け取りながらふと思う。

本当にこの子は何者なんだろうか？

「じゃあ、私が先に行くね」

少し強がりな口調で彼女は扉をくぐった。僕も続いて中に入る。

埃っぽい空気が鼻をつく。中の構造は螺旋階段となっているようで、
広くも狭くもない空間が確保されている。

既に先に進んでしまった彼女を追いかけた。僕達は終始無言で歩き続ける。

しばらくすれば時間の感覚などなくなり、何時間歩いているのか解らなくなってしまうた。ひよっとしたら一時間にも満たないかもしれないし、半日もかもしれない。

僕は歩いている間、彼女の観察に専念した。勿論、彼女の正体を知りたいというのもあるが、彼女がどうしても体力のある様に見えなかったからだ。

案の定というか、何というか。しばらくして、彼女は肩で息を始めた。

「大丈夫か？」

あまりに辛そうなので僕は

「なに……が？」

「疲れてないのか？」

「ぜん……ぜん………疲れて、ない」

息も絶え絶えなのによく言う。

「解った、僕が疲れたから少し休ませてくれないか？」

「……………それなら、いいよ」

彼女は振り向いて、階段に腰掛ける。

「じゃあ、五分休憩ね」

「ハイハイ」

僕は壁に寄りかかり彼女を見つめる。

「昔は地球の反対側でも自由に連絡が取れたんだよね」
彼女がポツリと呟いた。

「そうらしいね」

僕達が生まれる前のことと聞いている。高度に発達した文明があったという間に崩れ去ってしまった。原因は知らないが、かなりの衝撃だっただろう。少なくとも、世界を停める切っ掛けの一つになる

程度には。

「まるで魔法みたいだね」

彼女の表情がぱっと華やぐ。

「そんなものほとんど御伽噺じゃないか」

そう言つと、彼女は頬を膨らませた。

「御伽噺でもいいでしょ」

おもしろい、と思う。

空想を空想として認めた上で、虚しさを感じる様子もない。

だから彼女は美しいのだろうか？ そうとも思えるし、そうではない気もする。

「御伽噺だろうとそうじゃなかつと、結局何にも変わらないさ」

この世界はいつまでも停まつたままだ。

僕から何かを感じ取つたのだろうか。彼女は複雑な表情を見せる。

「そろそろ行こうか」

「……………うん」

ゆっくりと階段を上る。

なぜか彼女の背はさつきよりも弱々しく見える。

よく解らないが、直視できない。

ふと、僕は疑問を覚える。彼女は初対面の僕にどうしてこんな態度で接することができるのだろうか？ いや、逆か。どうして僕は彼女にこんなにも素直に接しているのだろうか。

あるいは空虚な心を埋めるように——いや、これも逆だ。器を持たない熱量に輪郭を与えるような、柔らかに受け止められるような安堵感。まるで知己と過ごすような温かさ。

なんとも形容しがたい、未体験の感覚だ

「ねえ、」

しばらくして、彼女が口を開いた。

「どうして貴方は私についてきてくれたの？」

「……………解らない」

この感覚が答えであつても、伝えようがない。

「私はね、この世界を知りたいんだ」

彼女は力強く言った。

「この世界にはちよつと探せば希望は満ちてるから。もっと、もっとこの世界を知りたい」

「……………」

僕はその言葉を肯定することはできないが、反証することもできない。

彼女は振り向き、僕を真っ直ぐにみつめる。

「貴方はどう？」

その言葉は異様に鋭い。

「貴方は何がしたい？」

僕は彼女の背後に射手の幻覚を見た。

—— ああ、やめてくれ！ それ以上は言わないでくれ！
核心的な言葉が矢として放たれる。

「貴方はこの世界が嫌いなのか？」

暗転

瞑想

暗幕

この世界はうんざりするほど停滞している。

停まって、固まって、凍っている。

僕はそんな状況に耐えられなくて、周囲と同じように諦めていた。
だが、本当にそうだろうか？

なぜ僕は街を毎日のように彷徨った？ なぜこの少女との出会いに衝撃を受けた？ なぜ僕はここまでやってきた？

ただ目を背けているだけじゃないのか？

この奥底から湧き上がるものはなんだ？ いや、もう気づいてるはずだ。

ああ、認めよう。これは渴望だ。

この世界に対するどうしようもない熱望だ。

気がつけば僕は泣いていた。

彼女にすがりつく様に、泣いていた。

彼女は震える僕を優しく包み込む。

「もう……大丈夫……」

彼女はうなずいて、僕から離れた。

「きつとあなたが思っているよりもこの世界はすごいよ？」

だから、と彼女は笑った。

「この世界を見つけないこう」

僕達は黙々と、けれど軽やかに残りの階段を上っていく。

そして、一つの扉の前にたどり着いた。なぜか扉の前だけ幅が広く、二人で並んで立つことができる。

彼女は僕を見つめ、

「開くよ」

と言った。

僕がうなずいたのを見て、彼女は僕の手を取る。

ゆつくりと扉を押し開けた。

流れ込む白に眼が暗む。

次第に目が慣れ見えたのは——白い海だった。

見渡す限りの雲海。

その全てを照らす陽光。

僕はこの瞬間を待ち望んでいたのだろうか？

体が燃えるように熱を帯びていた。これが歓喜なのか、安堵なのかは解らないが、ただただ涙が止まらない。

——魂が震えた。

「……綺麗だ」

「そうでしょ？」

にこりと、彼女は笑った。

「ね？ 貴方が思ってたより世界はすごいでしょ？」

「ああ……この世界が素晴らしい……」

ようやく解った。停まっていたのは世界じゃない。僕の心だ。世界を信じていなかった僕自身だ。

「温かいな」

僕は彼女の手を強く握る。

「そうだね」

彼女は僕の手を優しく握り返した。

この街に雨が降る。

静かな空を見上げ、僕は笑った。

あの光を見てからもう数年経つ。ようやく動き出した僕の心は、がむしゃらに走っている。たぶんこれからも止まらないだろう。

あの光をもう一度地上に取り戻す。それが目標ではあるが、まだまだ先の事になりそうだ。だが、少しずつ、着実に世界は変わり出した。

少し前ではこんなことは考えられなかった。数人が少し前を向くだけで、ここまで世界は変わる。ということは僕も変わったのだろうか？ 体感としては変わったというより、ようやく顔を上げただけなのだけれども。

あの少女はもういない。それでも僕は行けるとこまで行ってみよう。

コンコン、と扉を叩く音がした。扉の前にいる人物を想像すると少し顔がほころんだ。

コンコン、と再び扉がなった。

「ちよつと待つてくれよ」

苦笑しながら扉を開ければ、純白の女性が頬を膨らませていた。

「もう、遅いよ」

（後書き）

感想、批評、誤植報告よろしく願いします。

えっと、徹夜で書いて、落とし所を探したもの。

目指していたものとは結構違います、が

私、いっつもそんな感じなんで批評をくださいw

読み手がどんな風に感じられているのか知りたいです。

なんか、書ききった！ みたいな作品があんまりないなあ……これ
も構想とはだいぶ違ったんですねw

だから、というわけじゃないですが、もしかしたら、リメイクする
かもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5279s/>

シュガーレス・スウィート・レイン

2011年4月17日01時55分発行